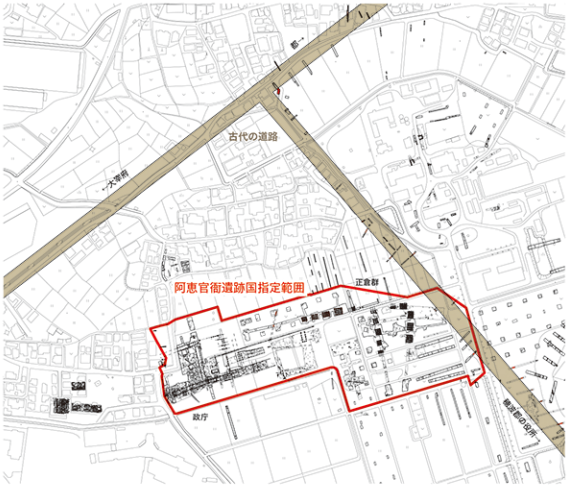
政庁～古代の役所の中心施設～

古代の役所の中心的な施設の一つである政庁の特ちょうをみていきましょう。

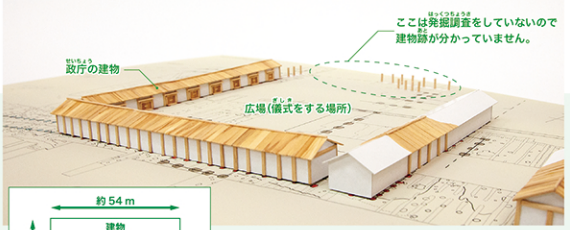
政庁は、周りを細長い建物や塀で囲って、その内側に広場のような空間をつくります（➡ 47 ページの写真）。閉ざされて外側から見えない広場は、厳しゅくで神聖な空間として、役所の儀式が行われていました。また、建物のなかは、役人が仕事をするための場所でもありました。筆で文字を書くときに使われたすずりのかけらや、役人が身に付けていたクシなどが発掘調査でみつかっています（➡ 47 ページの写真）。

阿恵官衙遺跡の政庁には、幅 4.2 m、長さ 42 mという細長い建物が建てられていました。そのような建物を並べて、一辺が約 54 mの正方形になるように組み合わせて政庁がつくられています。

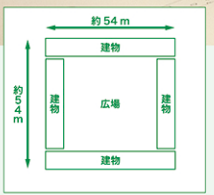
政庁の建物は、時代が経つにつれて建て替えを行い、少しずつ場所が移動していることも分かりました。日本が国家として成立した飛鳥時代から奈良時代にかけて、古代の役所の建物が移り変わっていくようすを明らかにすることは、国をつくるときに地方をどのように治めていったのかを考えるうえで重要です。



国史跡阿恵官衙遺跡と周辺のようす



国史跡阿恵官衙遺跡の政庁（復元模型）／粕屋町立歴史資料館に展示しています。



政庁の建物の配置です。（真上から見たところ）

学校の机とイスにそっくりだね！

役人の木製の机とイス（復元模型）／平城宮跡資料館［奈良県］の展示品で、奈良文化財研究所が所蔵しています。

阿恵官衙遺跡から見つかったクシ／当時の役人は髪が長かったので、クシを身に付けていました。

木簡の模型／文字をまちがえたときに、小刀で木をけずって消すようすです。

すずりで墨をすって、筆を使って木簡に文字を書きます。

仕事をする役人

紙はとても貴重だったから、代わりに「木簡」ていう木の板に文字を書いていたのよ。